

コーリッチ・ウェールズ著

ヒンドウー期のマライ半島

伊 東 照 司

英国の著名な考古学・美術史学者であるコーリッチ氏が今年、再び新しい本を発表した。氏は一九三五年に発表の「古代インド文化の波及に関する新しい交通路」(Royal India, Pakistan, and Ceylon Society, London, Indian Art and Letters)と題する著名な論文で知られ、氏の本来の研究の中心はマライ半島のインド化、特にシュリーヴィジャヤ王国に關してであった。その氏がその論文より四十一年ぶりに、これまでの研究成果をわかりやすく一冊の本にしてまとめあげた。それが本書である。

この本の構成は最初の序を除いて、全部で九章から成つて、それは次の通りである。

- 第一章…文献史料
- 第二章…古代彫刻
- 第三章…タームブラリンガ
- 第四章…ランカスカとカタールハ
- 第五章…シュリーヴィジャヤと宗教
- 第六章…シュリーヴィジャヤと交易

批評と紹介 伊東

第七章…チャンドラバーヌとグラヒーヒ仏

第八章…後の数世紀

第九章…結論

ここでは本書の中心がシュリーヴィジャヤに關してである故、紙面の關係からも、第五、六、七、の三つの章のみをとりあげ、述べていくことにしたい。

第五章のシュリーヴィジャヤと宗教の章にて、著者は最も力を入れて述べんとする、シュリーヴィジャヤ王国に關する考察に係る。八世紀末頃から三百年程の間、マライ半島は七世紀に干陀利国から展開したスマトラのシュリーヴィジャヤ帝国の支配下にあつた。その首都は従来の説によればスマトラのパレンバンであつたが、一九三五年に著者はマライ半島のチャイヤーがこの国の首都であつたとし、その理由としてパレンバンよりチャイヤーの方が考古学的な資料が豊富な点をあげている。六八四年に相当する Talang Tuvuo 出の碑文は明らかに七世紀のスマトラに大乘仏教が栄えていたことを伝えるが、同じく七世紀の記録では、小乗仏教も信奉されていたことを知る。第四章で述べたケダの遺構の内、大乘仏教のものは明らかにインドのベンガルから影響を受けているが、そういった八乃至十世紀の影響は全体に南インドを通じてのものであつた。つまりパラヴァ朝の首都 Katchi は古

くから仏教の中心地でもあり、例えば七世紀の *Katci* の *Dharmapala* 護法はナランダーに三十年間留学し、*Suvamadvipa* の地へ大乘仏教を伝導しているという。その頃に建立されたと思われるケダの *Sungai Bujang* の遺構は基本的に南インドの建築様式に基づいているが、結局バーラ朝建築の影響を受けて混成した性格のものとなっている。特に興味深い点はケダの遺跡番号10から密教法具である金製(一個)と銀製(六個)の法輪が発見され、その銀製の *Sarvapañjaha* の菩薩名が南インドの筆体で銘刻されていた。Bosch はこれらを九世紀後期のものとみなしている。この遺例も南インドとバーラ朝からの文化的関係を想定させる証拠として貴重である。この遺跡番号10以後、著者は同様にしてケダのブジャン川兩岸に見られる第四章で述べなかった遺構をそれぞれ紹介している。まず遺跡番号14号はその地出土の壺形土器内から西暦後八四八年に相当する年代を有した *Abbasid Caliph al-Muwahhid* (八四七—八六一年)の貨幣が発見されており、興味深い。それはこの遺構が九世紀のものであることを示すと同時に、ケダとアラブとの交渉を物語っている。遺跡番号11からは晩唐の青磁の破片が発見され、遺跡番号12からは唐代のものと思われる中国製鏡の断片二枚と南インド風の鉄製短剣が発見されたことを伝えている。遺跡番号16からは青銅製の鈴や燭台、九世紀頃の仏像の後背、それに南インドの小

さな太鼓の模型等を入れた青銅製棺が出土している。そして遺跡番号15から出た壺形土器に見る文様は著者によると今日マドラス博物館蔵の *Negiri* 山出のものや、また *Rejir* 出の中に同種の柄を認めるという。さらに遺跡番号13、8、9と順に論及している。

さてこの章の後半は半島で最も遺構遺品の豊富なチャイヤーに焦点をあてることになる。そこでまずこれまでナコーン・シー・タマラート出とされていた西暦後七七四年に相当する碑文をあげ、これが本来その地からではなく、チャイヤーから出たものだとしている。これはすでに一九七五年夏にジョグジャカルタで開催された会議にて公表されたが(山本達郎博士・海外東方学界消息(四十八)、第六回 国際アジア史会議、東方学第四十九輯)、著者はその点について更に詳しく述べている。それはチャイヤーの *Dharmadana* 学会の *Dharmadasa Banij* 氏の説によるもので、先のいわゆる「リゴール碑⁽¹⁾」として知られた碑文は明らかにチャイヤー出であったという。このことは七七五年、チャイヤーの地にシュリーヴィジャヤと称する国が確立されていたことを伝えるものである(A面)。その内容はシュリーヴィジャヤのある王の徳を称え、この王が蓮華手菩薩と釈迦牟尼仏と金剛手菩薩をそれぞれ安置した精舎を三つ建立したことを記している。先の *Dharmadasa* 氏の説によるとこれらの精舎をそれぞれチ

チャイヤーにある Wat Hua Wieng, Wat Long, Wat Keu の三つの寺院に比定しており、極めて興味深い。その位置を著者作成のチャイヤー地域の地図(図7)でもって示しており、先の Wat Hua Wieng は水濠に囲まれた都市内の中央にあり、それより南に向かって他の二寺が等間隔でもっておかれている。その二寺を含めて重要な寺院はすべて都市の外にあることに気付く。この三寺の内、Wat Hua Wieng と Wat Long の存在は一九二九年に Claeys 氏が見て記録し、著者もそれより数年後に確認したという。Claeys 氏によると Wat Long の基壇は十二メートル平方、Wat Hua Wieng のそれは六メートル平方あったという。そして前者は後にその西にある Wat Pra That の修復の際、そのレンガがそのために多量に用いられてしまった。残りの Wat Keu は現存する貴重な遺構であり、チャム建築に類似し、そこより石造の菩薩像一体が出たことは Coedès 氏によって報告されている。このチャム式の建築は様式的に九世紀のものであり、おそらくチャイヤーにいたチャム人によって建てられたのであろうという。いづれにせよ先の Claeys 氏の記録以後、一九四六年に土地の研究者によって Wat Long が発掘された。それによると Claeys 氏が記録した基壇の更に下に三十メートル平方の基壇が隠れていたと言ひ、それが先の碑文に見る当初の精舎の跡であらうとした。更に Wat Hua Wieng

は古い基壇の上に新しい寺院の Vihara が建てられてしまったため、発掘はなされなかったが、その住職の値の話からその Vihara の建立の際、やはり Wat Long の発掘で認めた程の基壇がその下にあったというのである。Wat Keu は著者によってその遺構の東西入口近くが試掘され、その成果は未出版に終わったが、その際に発見された入口へ登る階段が図版10Aをもって始めて紹介された。この発掘によって、現在残存する Wat Keu も、先のような古い基壇上にチャム式の建築がのって建っていることが明らかにされている。

都市跡の西にある Wat Pra That はチャイヤーにおける最も重要な寺院で、現在の塔堂は一九〇一年に再建されたものである。それは創建後に何度も修復がなされた遺構と思われるが、いまだにジャワのチャンディ式建築のなごりを留めている。その他チャイヤーには Wat Palelai & Wat To と称する寺院があり、これらも本来シュリーヴィジャヤ期の創建であらうが、後世の修復によって姿を変えてしまっている。更に Wat Mai Colathan や Wat Sala Tung よりヒンドゥー教像の断片や台座も出土しているという。そして最後にチャイヤー出の仏像について論じている。まず Wat Sala Tung 出の石造観音菩薩像(図版13、バーンコーク国立博物館蔵)にふれ、これはチャイヤー出の仏像の内、初期の作で

八世紀以後のものでないとし、その作柄は後期グプタの影響を受けているという。その肉付けは第二章での「Aグループ」のヴィシュヌ像（例えば Wieng Sra 出の像）と共通する。そして Wat Pira That の近くより出たという青銅製菩薩像（図版12、バーンコーク国立博物館蔵）をとりあげている。この像は時代的に先の像の次の段階に造像されたもので、そこにはパーラ朝美術からの影響が見られるという。それは八乃至九世紀頃の作とみなしている。ここで興味深い点はこの像と Perak の Bidor 出の青銅製観音菩薩像（図版11）とを対比させていることである。Perak はチャイヤーの南、先の第四章で述べたカタールハ国の地域であるが、その像は明らかに南インドのパッラヴァ朝美術の影響を受け、腰に虎皮をさげる点などはスマトラの Bugin 出の石造観音菩薩像と同様であるとしている。ただその Perak & Bugin 出の像の年代論については述べていない。いずれにせよ私の考へでは先の図版12の像は図像学的に観音菩薩であり、この種の遺例のみにて論じる場合、チャイヤー出のそれは中インドとの関係が明瞭である。

さて第六章では唐代のシュリーヴィジャヤ国の遺構遺品の考察であったが、第七章に及んで、その後の宋代の事情を再び遺構遺品を通じて論じている。まず八乃至十世紀頃のもの

と思われる中国やベルシャ製陶器の破片の山が西海岸のタクアバーに近い K'o Khau 島から多く出土しており、この種のものを半島の東海岸に見ないという。それもその島の南海岸の Tung Tuk にはレンガ造りの広大な基壇が残り、陶器の屋根瓦が発見される。この点からこの地がタムプラリナガ国のタクアバーへ入る航海者の重要な海港のような入口であったとみなされる。そしてそのタクアバーの Pira Narai 山の反対側にある三体のヒンドゥー教像について論じている（図版十四）。この像はすでに Legnald le May 氏によって紹介され有名であるが、中央に立つ四本腕の像はシヴァで、全体の三体でもってパッラヴァ朝美術によく知られる Gan-sadhara グループを表わすという。Lamb 氏の調査によると、⁽⁵⁾これらの像は本来それが置かれてある川の反対岸にある山頂の祠堂内に安置されてあったとみなしている。その像の近くから八世紀のタミル語碑が発見されたことは重要で、Nilakanta Sastri 氏によって解説されている。⁽⁶⁾それは Aravan-nāraṇam と称する Nangur-udaiyan によって掘られた溜池は軍キャンプの駐屯者である Manigattam の保護のもとにおかれる」と記されている。いずれにせよこのヒンドゥー教像は最近の O'Connor 氏の研究によると、それらは後期パッラヴァ朝美術の作風で、九世紀中頃の作とみなしている。更にこのヒンドゥー教像をあげたついでに、チャイヤー出の

スーリヤ像一体、Wieng Sra 出のヴィシュヌとシヴァ像一体ずつを述べ、それらにはチョーラ朝美術からの影響が認められるとし、いずれも十乃至十一世紀の作とみなしている。このチョーラ朝からの影響はその関係を一〇〇五年頃のチョーラ朝の碑文からも知ることができる。それによるとシュリーヴィジャヤ王 Maravijayattunga が南インドの Negapatam に仏教寺院を建立し、それにチョーラ王 Rajaraja I が大きな村の租入を寄進したことが記されているという。ところが一〇二五年に至り、Tanjore 碑文が示す如くチョーラ軍がスマトラやマライ半島に侵入し、パレンバンやカタールを含む多くの都市を攻略した。例えばその地名をあげると Madanalingam (Tambalinga), Langsoga (Langkasuka), Talatkolam (Takkola) 等がある。更に一〇六八年頃、カタールに起きた叛乱に直面したシュリーヴィジャヤ王がチョーラ朝の Viratjendra の援助でこれを鎮定したという碑文がある。そこで著者は一九三七―八十年になしたカタール Pengkalen Bujang の考古学的な資料を紹介する。即ち第四章でのブジャン川兩岸にある遺構について、引き続き論じる。まず遺跡番号 18 からアラビア風のガラスの容器(図版十五)や宋代の青磁が出土したことを伝えている。興味深い点として、タクアパーから出土する唐代の陶磁器がこの Pengkalen Bujang からは発見されないという。遺跡番号 19 は図

8 にそのプランが紹介され、そこから青磁が発見されたことから推して、十一乃至十三世紀のもので、それ自身はシヴァを信奉した祠堂であつたとみなしている。即ちそこから、二体のテラコッタ製のガネーシャ像の断片、巨大な鉄製のリンガ(クワラルムブル国立博物館蔵)、石造の九つの穴からなる聖遺品箱がそれぞれ発見されている。

さて以上の遺構はマライ半島の西海岸のカタールに関してであったが、次にその反対側の東海岸の Satinsphra について論じている。まずその都市跡を紹介し、その附近よりの出土品はソングクラの Wat Machimawas 美術館に収蔵されているという。また陶磁器等の出土品はソングクラ博物館にあり、その陶磁器の研究から Lamb はこの都市跡を一二〇〇年頃より十四乃至十五世紀間のもので年代付けている⁷⁾。そしてシュリーヴィジャヤ様式に基づく多くの大乘仏教の青銅仏も発見され、それらには観音や蓮華手や弥勒といった菩薩像があり、今日ソングクラ博物館に収蔵されている。また Phatlung の洞窟から多くの奉納板が発見され、Yala の洞窟にはシュリーヴィジャヤ様式の唯一の壁画が残存するという。次にナコーン・シー・タマラートについて論じ、そこにある Wat Maha That 寺院は十三世紀のセイロンからの影響を受けているといひ、特にそれを大塔の形体に認めることができる。更にその境内にある図版 18 B に示した

建築はチャイヤーの九乃至十世紀のものとみなされる *Wat Pra That* に見るものと類似する。しかしながら著者はこのナコーンを主に宋代の陶磁器の発見から、十一世紀以前にさかのぼらないとしている。さらにナコーンの南にあるシヴァ教寺院の遺構をあげ、これはアナヤール期に再建されたものであるが、そのプランは *Pengkalen Bujang* の遺跡番号19に類似するという。

著者は第七章に至りて、「チャンドラバーヌとグラヒーヒ仏」と題して論じている。十三世紀はタイの圧迫によつてクメール帝国が衰退し、シュリーヴィジャヤが崩壊した時期である。即ちタイの *Sri Indradya* 王によるスコータイ王朝のはじまりと共に、マライ半島にチャンドラバーヌ *Candrabhanu* と称する支配者が台頭する。これはシュリーヴィジャヤの圧制をふりきつて、*Sruk Grahi* と称するシュリーヴィジャヤの旧都チャイヤーを支配下に入れる。そのチャンドラバーヌに関しては一二三〇年の梵碑から知ることができ、その全文を英訳して紹介している（一五九頁）。その碑文はある仏教寺院への献納を祝しているようであるが、その寺院がチャイヤーでなくナコーン・シー・タマラートに設立されたことを伝えている。更にこの王に関してセイロンの年代記 *Culavamsa* に見る *Parakramabahu II* の治世の記述に、

その王の治世十一年目にチャンドラバーヌが彼の軍をひきいてセイロン島に遠征したとある。著者は同様にその部分の英訳を紹介している（一六〇頁）。これは一二四七年のことであったが、更に一二七〇年にチャンドラバーヌの第二回遠征がセイロンになされたことが同じくその年代記に記されているという。こういった遠征は王がセイロンの上座部仏教の受容を強く望んだためと解される。そしてそのセイロン仏教の導入は北方のスコータイ朝へも譲り伝えられるのである。そのスコータイ朝との関係はパーリ語の年代記 *Jinakamini* 内に記されている。それによると一二五六年の *Indradya* 王の治世に、王はメナム・チャオパヤー河を南下してナコーン・シー・タマラートに向かったとあり、そして両王はセイロンで話題となっていた奇跡を生じる仏像 *Silinga* 仏をくれるよう使節をセイロンに遣わしている。セイロン王はその願いを受け入れ、その仏を使節に渡し使節は船にてナコーンへ向かったが、途中で船が難破してしまふ。ところがその仏像のみ奇跡的にナコーン近くに着くという。そしてチャンドラバーヌ王はそれを手にし、その仏像を *Indradya* 王に渡すのである。この十三世紀の建立とみなされているナコーンにある *Wat Maha That* の大塔はセイロンのアスラーダブラにある *Mahāhupa* を模したものだといわれ、先のセイロンとの関係を明確に伝える遺構である。

さて次に現在バーンコーク国立博物館に展示されている有名な「グラーヒ仏」について論じている。この青銅仏（図版19）は蛇ナীগ上に坐す仏坐像であるが、チャイヤーの Wat Hua Wieng 近くの野で発見されたという。この像は明らかに仏陀と蛇の部分が離れるようになっていて、別々に铸造されたものである。著者はこの仏陀像の部分を一三世紀末以前の作でないとしている。更に蛇の台の部分には銘文があり、それからこの蛇の部分が一一八三年に铸造されたとこれまで考えられてきた。この考えに従うと、ナীগ部が造られた時の仏像は消失し、後に今日に見る新しい仏坐像がその上に置かれたことになる。そのため、蛇上にのる仏坐像は図像上、禅定印をむすぶのが普通であるが、この場合それが降魔印をとる仏がのっている。この点からも、後世に別の仏像をその上に代用したことが推察される。先の銘文であるが、それは古クメール語を古スマトラ文字で銘刻した五行からなるもので、Coedès 氏によって最初に解読された。それによると、*Kamraten an Mahārāja Śrinat-Traikṛtyarāja-Maṇibhūṣa-ravarnadeva* 王の治世のグラーヒ地方の統治者 *Ṭalanai* によって铸造され、氏はその製作年代を一一八三年に相当すると解した。ところが Coedès 氏の後に、*de Casparis* 氏はこのグラーヒ仏に関して新しい見解を示している。⁽⁸⁾ 第一に仮に蛇の部分が代用の仏坐像のために使用されたとするなら、代

用の仏を献じて、そこに置いたという銘があっても不自然ではないと見る。第二に先の王の称号は明らかにスマトラの統治者のものと一致するとし、第三に、年代付けの決め手となっている銘文中に見る十二支は Coedès 氏のみなした如き十二世紀という早い時期のものでないという。つまり十二支の使用はスコタイ朝の *Rām Kanhēng* 王以前の東南アジアで知られていないとし、十三世紀末頃である。それは更にその十三世紀末の記録で、周達観による「真臘風土記」内にも、その十二支の使用が記されているという。そこで *de Casparis* 氏は銘文中に見るうさぎの年（卯）とはおそらく一二七九年か一二九一年のどちらかの年のことであると結論付けている。その後者の年は、*Rām Kanhēng* 王がタムブラリンガ（ナコーン・シー・タマラート）を含む彼の版図を宣言した碑文のわずか一年前に相当する。いずれにせよ氏は銘文に関して、それはシュリーヴィジャヤ文字を用いているが、筆記者はクメール族もしくはクメールに通じたマライ人であったろうとし、そこに見る暦は明らかにタイ族のものであるという。そして仏陀像の像容に関して、そこには降魔印をとり、半跏趺坐で、サンカーティの形式といい、スコタイ期のタイ美術との類似性が指摘される。さらにナীগ上に坐す仏像を造る担い手はクメール美術の所産である点から、そこには明らかにクメールからの影響が同様に認められ

る。こういった点からこの像の作柄はタイやクメールの要素を混成したものであること、明らかである。

以上、本書は十五世紀の回教侵入までのマライ半島に見るヒンドゥー化した諸国の歴史的文化的な事情を、現地に認められる遺構・遺品をおって、それを通じて考察したものである。その基礎となっているのはやはり漢籍史料であり、そこに見る記述と現地で接するそれらとをいかに符合させるかという作業である。これはこの著者のみならず、著者がしきりと引用した、最近の活躍に目をみはる Stanley J. O'Connor, J. 氏の研究方法もその如く、漢籍史料の記述、あるいは碑文史料を加えて、それらが美術遺品とどのように関係付けられるかという時代的、地理的な組み立て作業である。そのためには現地の出土品等の資料の収集や遺跡の分布状況を知ることが当然必要とされ、従って現地の学者からそれらの情報を学ぶという基本的な研究姿勢が強調される。それは我々も採るべき重要な点で、本書は著者がそういった関係を大切に保ってこられた、これまでの貴重な成果であったと私は考へる。

(一九七六年十一月二十四日)

註

(一) B. Buribhand and A. B. Griswold, "Sculpture of

Peninsular Siam in the Ayudhya period" *JSS*, Vol. xxxviii, pt. 2, 1951, pp. 26f.

(二) J. T. Claeys, *L'Archéologie du Siam*, 1931, pp. 26f.

(三) G. Coedès, *Les Collections Archéologiques du Musée National de Bangkok*, *Ars Asiatica*, Vol. x ii, Paris, 1928, p. 25, pl. xiv.

(四) Legnald le May, *A Concise History of Buddhist Art in Siam*, London, 1938, pl. 41-2.

(五) A. Lamb, "Three Statues in a Tree: a note on the P'ra Narai Group, Takuapa", *Federation Museums Journal*, Vol. vi, 1961, pp. 64-8.

(六) K. A. Nilakanta Sastri, "Takuapa and its Tamil Inscription", *JMBRAS*, Vol. xxii, pt. I, 1949, pp. 25-30.

(七) A. Lamb, "Notes on Satingsphra", *JMBRAS*, Vol. xxxvii, pt. I, 1964, pp. 74-86, with 25 plates.

(八) De Casparis, "The Date of the Grāhi Buddha" *JSS*, Vol. LV, pt. I, 1967, pp. 30-40.

(九) P. Dupont, "Le Buddha de Grāhi et l'écôle de C'āyā", *BEFEO*, Vol. XIII, pp. 17-55.

(H. G. Quaritch Wales, *The Malay Peninsula in Hindu Times*, London, 1976, 199 p.)